

丘の上の下町

戀ル・ネストウール

覆いなき藍一面の朝姿の空につぐみは怖けぬとめり

壺口の雑談の道抜けい出て胸に吸いませ 天翔ける風

朝あがり市に鮮々諸色の言葉と肌と果物のあり

丘の上の下町馴染みの鼻歌を紡ぎだしたる人の足取り

光陰は捷しとまさに思いしや 黒い羽影が白壁を過ぐ

珈琲の小粒の豆のくちびるの子どもが眠る幹の項根よ

裏町の小さき窓持つ壁の背に雅な尾ひれの雲が生まれる

黄昏の吐息を纏ふ亜麻色の少女の髪と出会ふ坂道

我也居る、天蓋暮れるキャフェに見ゆ大気の臍腑の人の暮らしよ

街灯りほんのりかかる天數ふ大らか星の杓水を待つ



挿絵：ミサヨ